

私の思い出の場所
My memorable place

長崎ゴールデンボウル

波乱の時代に見つけた居場所

才木邦夫さん 教育学部・1973年卒業

私が高校3年の頃、全国で巻き起こっていた学生運動の波はピークを迎えていました。長崎大学前でも警察や機動隊が人だかりを作り、その光景を登校中のバスの中から横目に見た目もありました。

そんな中、本来ならば大学で行われるはずの入学試験は別会場になり、私たち受験生は警察官に警護されながら会場に入りました。合格発表は文教キャンパスまで見に行きましたが、その後の入学式は実施されず、キャンパスでは教養部棟(現、環境科学部棟)を学生の運動家たちがバリケードを築き占拠(2カ月ほどあと、建物の屋上と地上とで、運動家と新入生、一般学生連合軍が石を投げ合うなどの攻防戦の結果、やっと解放された)するなど、波乱の大学生活の始まりでした。

この解放されるまでの2カ月間は講義

もまったくありませんでした。モヤモヤが募る中、私は入部するクラブをバドミントン部と決めていたため、部室を訪ねることにしました。「授業がないなら来たらいいよ」と先輩たちが温かく迎えてくれ、そこからの私の大学生活はまさに「バドミントン学部バドミントン学科」。毎日のように練習に励み、専門書を読み漁っては相手に想定されない球筋の研究に余念がありませんでした。

トレーニングの一環として通っていたのが、大学近くにあったボウリング場「長崎ゴールデンボウル」です。当時は空前のボウリングブーム。長大生はみんな行っていたかもしれません。土日ともなれば行列ができるほどの人気でした。私は週1回程度、料金が割安な早朝の時間帯に一人で出かけて、たっぷり12ゲーム汗を流した後に大学へ。投げた球は最重量の16ポンド(7.26kg)でした。当時は遊



びも一生懸命な学生が多かったと思います。いつしかボウリングブームは過ぎ去り、ゴールデンボウルも閉館となり、跡地にはマンションが建設されましたが、そこを通ると、学生生活を思い出します。

また、クラブの仲間たちとよく出かけた店が「グッルOK」です。コーヒー1杯で2時間、3時間粘っても追い出されない居心地の良い店でした。

当時、志を持って入学した学生の中には、入学式や講義が行われない状況に、虚しさを感じた人もいたかもしれません。私は幸いなことに、バドミントンというやりがいが見つかり、そして居場所を見つけることができました。50歳まで続けたバドミントンから今はゴルフへ。年齢を重ね、また新たな楽しみが見つかっていきます。

読者プレゼント



長大珈琲館
スペシャルブレンド(粉) 5人
長崎大学オリジナルコーヒー。全4種のうち、今回はスペシャルブレンドをご用意しました。ぜひご堪能ください。長崎大学生協売店で販売中です。



卒業記念文鎮 3人
以前は卒業の記念品として配られていた文鎮。そこに刻まれているのは、ラテン語で「高きより高きへ」を意味する「AB ALTO AD ALTUM」。非売品。



磨き大島 波佐見焼 グラスセット 1人
長崎県産つまずと清らかな「西海の水」を使った本格芋焼酎と、長崎大学のロゴマークが入った波佐見焼グラスのセット。長崎大学生協売店で販売中です。

79号のクイズ Q 長崎大学の広報誌「Choho」が創刊したのは何年でしょうか。 答え/②2002年

アンケートのご案内

広報誌Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。プレゼントのご応募も以下より承ります。①面白かった記事②本紙に対する意見・感想③今後取り扱ってほしい内容④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想⑤職業⑥年齢⑦ご希望のプレゼント⑧氏名(ふりがな)⑨郵便番号⑩住所⑪電話番号を明記してください。

- ハガキ 〒851-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛
- FAX 095-819-2156
- メール kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp
- または上のコードから
- 応募締切日/2023年2月末 当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます

編集後記

Vol.80を迎えた長崎大学広報誌Chohoは、今号より新たな形態に形を変えました。これまでは冊子の形で主に高校生、受験生を対象に編集を行ってまいりましたが、彼らをターゲットにした情報発信はホームページ等インターネットに集約していきます。そして、今号より、Chohoのメインターゲットを長崎大学同窓生とし、加えて長崎に住む市民、県民の皆さまにも楽しんでいただける内容とするを旨とします。形態も新聞感覚で手軽に読んでいただけるよう、タブロイド判を採用しました。当面、発行は年に2回とし、約1万5,000部/号の部数を予定しています。大学の発展は、現役の教職員、学生の努力だけでなく、多くの同窓生と地元の皆さまの関心を獲得し、サポーターになっていただいでこそ、成し得るものです。Choho創刊時の「大学と地域の垣根を取り払う」というコンセプトを改めて編集方針の根幹に置き、長崎大学の思いや姿、描く未来などを、皆さまと共有していただける広報紙へと育てていきたいと思ひます。(河野 茂)

長崎大学のウクライナ支援特設ページ



今回の特集では、長崎大学とウクライナの歴史に触れながら、現在のウクライナ避難民学生への支援についてお伝えしてきました。長崎大学はこれからも、ウクライナの学生の皆さまが学び続けられるよう支援を続けていきます。この特設ページでは、本紙ではお伝えできなかった情報や、学びの様子をご紹介します。最新情報をお届けしますので、ぜひご覧ください。

https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/pickup/ukraine/index.html

長崎大学SNSサイト



Facebook



Twitter



Instagram



Choho

人を結ぶ 地域と繋ぐ
[長崎大学チャオホー]

「大学と地域の垣根を取り払う」をコンセプトに、長崎大学の思いや姿、描く未来などを共有し、多くの皆さまに長崎大学へ関心をお寄せいただけるような広報紙を目指します。

30年を超えるウクライナとの関係と支援



河野 茂 長崎大学 学長

長崎大学は2022年3月18日、ウクライナの避難民学生を大学に受け入れることを発表しました。2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻により避難を余儀なくされたり、通っていた大学が被害を受けたりなどで多くの学生たちが学びを中断せざるを得なくなりました。そこで、学びの場を奪われたウクライナの学生に学び続ける場を提供する支援を決定したのです。

その背景は、長崎が原爆の惨禍を経験したことにあります。長崎と長崎大学は、原爆の惨禍によって壊滅した街の復興のプロセスに携わり、見守り続けてきた中で、学び続けること、知の力を蓄えることの大切さと強さ、価値を常に感じていました。そして、なによりも、どのような逆境に置かれようとも学び続ける志を持った若者の存在自体が、国の将来を支える礎となり、希望となることを私たちは知っており、それが支援を決定する大きな原動力となりました。

ウクライナの国土やインフラは、いまや大きく棄損されています。これらを再建するには、あらゆる分野において専門知識を持った多くの人材が必要不可欠です。日本で、長崎大学で学んだことがいつか必ずや祖国の復興に役立ててもらえるものと信じてこの支援は始まりました。

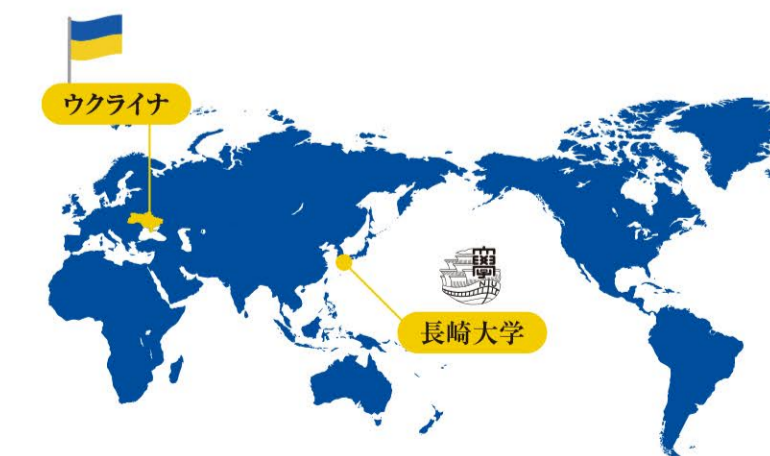
さらにもう一つ、長崎大学はウクライナとの関係を1990年以来、長きにわたって持っている大学です。1986年に起きたチェルノビル原子力発電所事故の際に、日本で最初に長崎大学の医療調査支援チームが現地に入り、地元住民の健康調査や支援活動にあたりました。この時の協力関係は今も形を変えながらも継続しており、長崎大学の教職員もこれまでたびたびウクライナを訪れていました。このように、ウクライナと長崎大学の間には30年以上に及ぶ非常に長く深い歴史があるのです。

「災い転じて福となす」という言葉があります。このことを機にこれまで研究者同士の交流が中心だったウクライナとの協力関係を、さらに学生同士、教育面にも拡大、発展させ、より良い未来を築いたら、と願っています。



長崎大学とウクライナ 1986-2022

ウクライナと長崎大学の間に続く関係と長崎大学が行っている支援、そしてその背景。特集では、過去に遡ってこれまでの歩みを振り返ります。また、ウクライナ避難民学生の受け入れに関する具体的な取り組みもご紹介します。



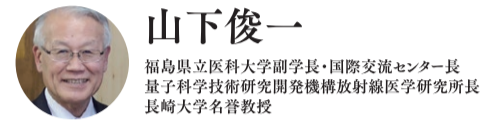
7月26日に行われた「長崎平和学」特別講義の一環として、留学生の皆さまが平和公園や原爆資料館を訪れました。





長崎大学とウクライナ 36年の軌跡

医療支援から見えてきた 2つのターニングポイント



山下俊一
福島県立医科大学副学長・国際交流センター長
量子科学技術研究開発機構放射線医学研究所長
長崎大学名誉教授

1986年4月26日未明に発生したチヨルノーベリ原発事故。当時、旧ソ連と西側諸国は冷戦関係にありましたが、ヨーロッパの広い地域に及んだ被害の甚大さから、1週間後には米国による被ばく者支援活動が水面下で始まっていました。

1990年8月、日本船舶振興会(現、日本財団)の援助により、日本の専門家たちが現地に派遣され、長崎大学医学部附属病院(当時)第一内科の長瀬重信教授らがミッションに加わりました。その翌年から、長崎大学と広島大学などによる支援活動は本格化します。笹川チェルノブリ医療協力プロジェクトの名の下、ロシア、ベラルーシ、ウクライナの5カ所に拠点となる診断センターを設置(ウクライナはキーウ、コロステン)の2カ所。長崎大、広島大の専門家が定期巡回し、甲状腺、血液、線量、疫学の4グループに分かれて診断や評価などを行いました。その間、重要なターニングポイントとなったのが次の2点です。

1点目は、事故と甲状腺疾患の因果関係に

まつわる研究調査です。事故当時0歳～5歳だった約12万人の検診データから、小児甲状腺がんの増加を示唆するデータが、事故後5年が経って報告されました。私たちは放射線の影響を証明するため、国際機関と共

同で疫学調査を実施。5年に及ぶ長期調査の結果、チヨルノーベリ原発事故による直接的な健康影響は、事故直後の汚染された牧草を食べた牛のミルクを飲用したことによる、甲状腺がんのみであると世界で初めて証明しました。これ以降、同様の事故が発生した場合は、汚染されたミルクの検査と廃棄が最優先事項になりました。

2点目は人材育成です。長期的なフォローアップには、現地人材の育成が不可欠でした。長崎大学は1992年に設立された長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)を通じて、原発事故被害に遭った各国から研修生を受け入れ、診断や解析技術などを指導。現在も各



1991年5月、ウクライナ・ゾームル州コロステンにて。

国の専門家が、国境を越えて学术交流を図る場になっています。また、ウクライナに限って言えば、長崎大学はキーウのウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所、同放射線医学研究所の両機関と協定を結び、共同研究など学術面において成果を上げています。

2011年2月中旬、緊急被ばく医療の世界の専門家たちが一堂に会した「WHO-REMPAN 緊急被ばく医療国際専門家会議」が長崎で開催されました。事故が発生した場合のシミュレーションや情報共有に向けたネットワーク構築などが行われましたが、この時はチヨルノーベリの経験が、それから1カ月も経たないうちに、福島で活かされることになるとは思っていませんでした。

ウクライナの学生を受け入れる重要な動機となったのが、かつて旧ソ連下で起きたチヨルノーベリ原発事故。原爆後障害医療研究所を擁する長崎大学から専門家が現地へ渡り、医療支援に従事しました。そしてそこで得た経験が福島に、さらにはウクライナ学生の受け入れにつながります。当時を知るお二人のお話を伺いました。

※国名、地名の表記は、外務省が用いる公式表記に基づきました(固有名称は除く)。

チヨルノーベリの教訓と 福島の復興支援



高村 昇
長崎大学原爆後障害医療研究所 教授
福島未来創造支援センター長
東日本大震災・原子力災害伝承館 館長

2011年3月11日、東日本大震災によって起きた福島第一原子力発電所の事故後、被ばく医療の専門家として、私たちは福島に向かいました。放射線被ばくによる住民の健康リスク評価や管理を行うとともに、山下俊一先生と私はチヨルノーベリで得られたデータに基づき講演活動を実施。そしてこの活動が、いち早く帰村宣言をした川内村の遠藤村長との出会いにつながりました。2011年12月には川内村復興支援を開始し、帰還に向けた支援と帰還後のリスクコミュニケーションなどを継続。避難時には荒れ果てた村の田畑は緑が戻り、豊かな里山がよみがえりつつあります。

また、事故後わずか3カ月で立ち上げられた県民健康調査では、現

在も引き続き被ばく線量、甲状腺、健康、妊産婦、心のケアの5つの調査が行われています。また、川内村以外の町村でも新たな拠点づくりを進めるなど、事故から11年が経過した今も復興支援は変わらず長期戦であり、むしろ、これからの正念場です。そこで、チヨルノーベリで得た経験が、大きな力になることは間違いありま



川内村住民訪問線量評価の様子。

せん。事故によって被害に遭われた方の思いを胸に、教訓とともに、強い意志と覚悟をもってこれからも支援にあたります。



川内小学校での授業。

ウクライナ学生の 受け入れに あたって



森口 勇
長崎大学理事(教学担当)

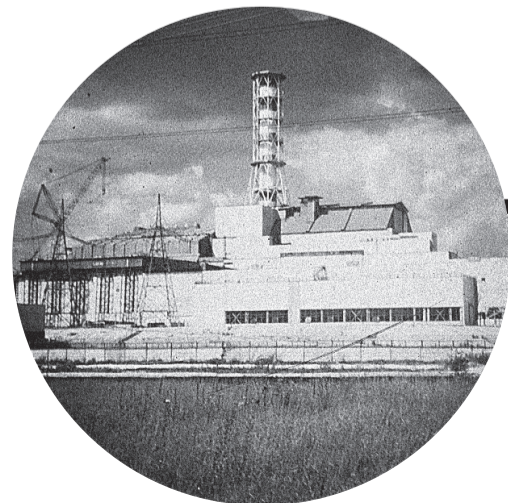
長崎大学では、ウクライナの大学生、大学院生らに継続的かつ安心して高等教育を受けられる機会を提供する目的で、彼らの受け入れを決定しました。受け入れにあたっては、長崎大学が示した条件に合うことを書類で確認できた学生、全員と個別にオンラインで面談を実施。長崎大学の講義が理解できるだけの英語力を有しているか、さらに日本語を学んでいる学生にはその習熟度も確認し、受け入れ許可を通知しました。

また、長崎に来てからは、最優先で心のケアを丁寧に行っています。当初は大きな音や飛行機の音に敏感に反応する学生もいました。私たちは、少しでも落ち着いた環境で安心して学び過ごせるよう、長崎大学に来て良かったと思ってもらえるよう、そして長崎で学んだ学生が、ウクライナ復興の中核の人材となることを祈って、今後も受け入れおよび支援を充実させていきます。



事前にオンライン面談を実施。

1986 チヨルノーベリ 原発事故



4月26日、原子炉の一つが実験中に制御不能に陥り、炉心溶融の後、爆発。大量の放射線物質を、ヨーロッパをはじめ世界にまき散らす事態を引き起こした。

1991 長崎大学がウクライナにおける 現地支援を開始

長崎大学は、広島大学、放射線医学総合研究所(当時)、放射線影響研究所と連携し、現地における健康管理調査と医療支援を開始。

2003 ウクライナの 研究機関と 学術協定を締結

長崎大学は、ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所および放射線医学研究所と、2月に学術交流協定を締結。



1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021

1990 長崎大学から ウクライナへ 医療者を派遣

8月、長崎大学の第一内科長瀬重信教授(当時)をはじめとする3人の教授がウクライナに赴き支援の礎を築く。



写真提供: 原田眞理様

1992 長崎・ヒバクシャ 医療国際協力会 (NASHIM) 設立

チヨルノーベリ原発周辺国の医療従事者、研究者を招き、被ばく医療に対応できる人材の育成を目的に設立。



写真提供: NASHIM

2014 福島未来創造支援 研究センター開設

震災と原発事故に被災した市町村に対し、健康、医療、福祉、教育等の包括的かつ具体的な支援と協力をし、福島県の未来創造に貢献するセンターを開設。



2015 災害・被ばく医療科学 共同専攻(修士課程)開設

長崎大学と福島県立医科大学は被ばく医療、災害医療、放射線健康リスク管理に秀で、複合災害に長期にわたって対応できる被ばく医療人材の育成を目指す。

2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021

2011 3.11

東日本大震災・ 東京電力福島第一原子力 発電所事故

マグニチュード9.0の地震、高さ10mを超える津波、国際原子力事象評価尺度で最上位となるレベル7の原発事故という世界に類を見ない複合災害となった。

原発事故 直後の対応

チヨルノーベリの知見に基づき、福島県では原乳の廃棄、生鮮野菜等の流通停止などの対策がすぐに取りられた。

福島県 「県民健康調査」開始

チヨルノーベリ原発事故の知見を基に、福島県民を対象とした健康調査が、長崎大学などの協力により、震災からわずか3カ月後にスタート。



写真提供: 福島県立医科大学

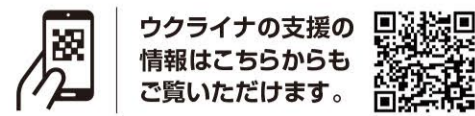
2022 ロシアの ウクライナ侵攻



ウクライナ避難民学生 受け入れを決定

2月24日、ロシアのウクライナ侵攻を受けて、3月18日、長崎大学はウクライナ避難民学生の受け入れを決定。

長崎大学のウクライナ支援



河野茂学長がウクライナ特命全権大使と面会

7月6日、長崎大学河野茂学長が在日ウクライナ大使館を訪れ、セルギー・コルスンスキー特命全権大使に面会しました。面会では、長崎大学が3月18日に表明したウクライナ避難民学生受け入れの概要を説明し、受け入れの現状を報告しました。この訪問の時点で19人の学生の受け入れが決定しており、引き続き40人程度を目標に面談を行っていること、すでに9人(大使館訪問時)が来崎し、長崎大学で学生生活を送って

いることをお伝えしました。これを受けて、大使は「日本で学ぶことは、彼らにとって夢のようなことです。受け入れていただきありがとうございます。彼らの学びがいつかウクライナのために役立つことは間違いありません」とコメントされ、カリキュラムなど多くの質問もいただきました。河野学長からは「長崎を訪れ、長崎の歴史を見ていただくとともに、長崎大学にいるウクライナの学生にもぜひ会い、激励してあげてください」と、メッセージを伝えました。



河野茂学長とセルギー・コルスンスキー特命全権大使。

茶道を通じて日本文化を体験

7月4日、日本文化を学ぶ授業の一環として、「茶道裏千家 淡交会 長崎支部 英語クラブ T.N.E.C」の皆さんを本学にお招きし、ウクライナの学生8人を含む、10人の留学生が茶道を体験しました。学生たちは、学生会館2階に設けられた茶室において、講師から英語で茶道の歴史や作法の説明を受けた後、茶道のデモンストレーションを見学。その後、一人一人丁寧に手ほどきを受けながら、抹茶と和菓子をいただきました。最初はやや緊張した面持ちでし



茶道体験に参加した皆さん。

たが、徐々に打ち解け、最後は「楽しかった」と講師と笑顔で言葉を交わしました。参加したウクライナの学生からは「茶道は初めての経験でとても楽しかった」「日本の文化とヨーロッパの文化の違いを発見し、とても興味深かった」「日本的な雰囲気を感じられる茶室が好きだった」などの声が挙がりました。

OBの皆さま、ご支援をいただいた皆さまありがとうございました

「学びの場を失ったウクライナの学生たちに学習継続の場を」と題して2022年4月から3カ月間にわたり実施したクラウドファンディングは、591人の方から当初の目標額1,000万円を大きく上回る1,226万円ものご寄付をいただきました。皆さまからいただいたご寄付は、受け入れ学生の渡航費や生活支援金、提供する住居に必要な生活物資の購入等に充てさせていただきます。



県立長崎高等学校の生徒会の皆さんからもご寄付をいただきました。会計委員長の高口さん(左)、生徒会長の太田さん。

(インタビュー)

ウクライナの学生をサポート

2023年3月末(予定)まで滞在中のウクライナの皆さん。滞在中、彼らをサポートする方々にお話を伺いました。

長崎で過ごすひとときを充電期間に

長崎大学ではウクライナから学生を受け入れるにあたり、リベラルアーツを軸にしたプログラムを準備。日本語教育や長崎平和学、華道、茶道など、日本文化や長崎の歴史に触れる内容が予定されています。そんな中、学習支援だけでなく、生活面の相談にも対応するのが、留学生教育・支援センターの茅田美有紀准教授と郭显助助教です。



指導教員の茅田美有紀准教授(左)と郭显助助教。

「日本語に関しては、まず7月11日から短期集中的に学ぶ場を設けました。ひらがなから学習するクラスと、日本語を使って発表するクラスの2クラスに分かれて、1日2コマか1コマ合計30コマと、1学期分のボリュームになります。後期課程でもプログラムは維

続します。期間が限られていますので、生活をより楽しむための日本語として勉強し、いろいろな人たちと交流する手段にしてほしいですね。滞在中は、とにかく幸せに過ごしてほしいと思います」と茅田准教授。郭助教は、かつてご自身が留学生として来日した経験から、次のように語ります。「大変な状況の中での留学生活なので、メンタルなどもセンシティブになってしまっている部分があるかと思いますが、滞在中はせわしない日々が続くかもしれませんが、その方がいろいろな意味で気力を蓄えるための“穏やかな”時間でもありますし、有意義に感じた今の時間が前向きにしてくれるのではないかと思います。」

心と心を通わせる共同生活

比嘉李音さんは多文化社会学部の1年生。国際学寮ホルテンシアで、ウクライナから来たソフィアさんと共同生活を送っています。「例えば、銀行口座を開設する時に通訳をしたり、ゴミの出し方を教えたり、主に生活面をサポートしています。ルームメイトは私を含め日本人3人とソフィアさんの4人です。一緒に生活しているからこそ過ごす時間も長く、コミュニケーションを頻繁に取れるのは

共同生活のメリットではないでしょうか。食事も献立から調理まで共同作業です。彼女はベジタリアンなので、先日はそぼろの代わりに豆腐を使って三色丼を作りました。私自身、大学入学を機に沖縄から長崎に来て間もないので、稲佐山など観光スポットと一緒に巡りながら長崎の良いところを見つけて、教えられたらいいなと思っています。」



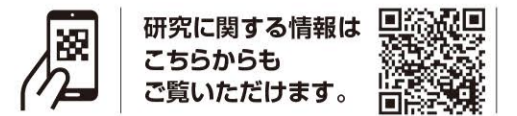
豆腐を代用して作った三色丼。



ルームメイト4人で和やかにタコスパーティー。左奥が比嘉さん。

Research

[研究]

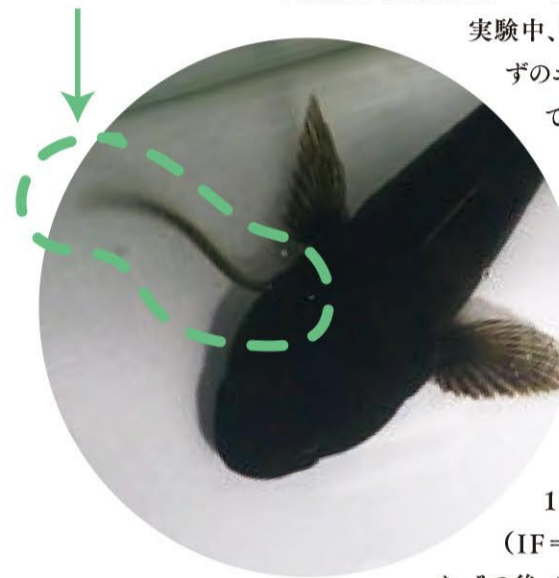


食べられても逃げる!? ウナギの捕食回避行動にビックリ

2021年12月、水産・環境科学総合研究科博士前期課程2年の長谷川悠波さん(当時:博士前期課程1年)と河端雄毅准教授は、国立研究開発法人水産研究・教育機構の横内一樹主任研究員と共同で、ニホンウナギは捕食者のエラの隙間から脱出できるという内容の論文を発表しました。

本研究は、もともと淡水魚好きだった長谷川さんが水産学部4年次に、河端准教授と共に着手。卒業研究として取り組みました。河端准教授いわく、国内外にウナギの研究者は多数いるものの、捕食回避行動をテーマにした研究はほぼなかったのだとか。

捕食者であるドンコのエラの隙間からニホンウナギの稚魚が抜け出している様子。実験では、54匹中28匹が抜け出していました。



実験中、捕食者であるドンコに食べられたはずのニホンウナギの稚魚が、水槽で泳いでいるところを見つけた長谷川さん。捕食の瞬間だけでなく、捕食後もカメラで撮影し続けたところ、ドンコのエラの隙間から稚魚が逃げ出し、生き延びている様子を捉えることに成功しました。

研究成果は、2021年9月の動物行動学会にて発表が行われ、優秀賞を受賞。同年12月には国際学術雑誌「Ecology (IF=5.499)」に、論文が掲載されました。その後、テレビや新聞など、マスメディアだけで20社以上の取材が殺到。2022年上半年に長崎大学がプレスリリースした研究の中で、もっとも脚光を浴びる結果になりました。

反響の要因や感想について、お二人は次のように話します。「捕食者に捕獲された後に能動的に脱出する行動は、脊椎動物では世界初の発見であること、写真1枚で一般にも分かりやすい研究であることが評価されたのではないのでしょうか。ウナギの捕食回避行動というマニアックな分野に注目していただき、大変ありがたいと思っています。専門家の皆さんや一般の方にも興味を持っていただくきっかけになり、本当

に良かったです。」

お二人は、ニホンウナギの捕食回避行動に関する、新たな実験に取り組んでいます。発表前(取材時)であるため、詳細を明かすことはできませんが、軌道に乗るまで8カ月を要し、現在は興味深い実験データが集まっているのだとか。

長谷川さんは2023年春に前期課程を修了後、後期課程に進学予定。進学するかどうかとも迷ったそう。「昨年、横浜の水産資源研究所で行ったインターンシップ時に、共同研究者の方や職員の方からいただいたアドバイスが、進学を決めるきっかけになりました。また、苦戦していた研究も面白いデータを得られるようになり、2年で終わらせるのもたないとも思いました。」

この夏、スウェーデンで開催された国際行動生態学会(ISBE)に参加。ポスターセッションを通じて研究成果を発表するなど貴重な経験も、長谷川さんの研究活動を後押ししています。「動画を見て驚いた研究者の方が、周囲の方にも声を掛けてくださるなど、常に複数人がポスターの周りに集まっている状況でした。海外でも私たちの研究が十分に勝負できること、そして今大会でも大きなインパクトを残せたことと実感しています。自信にもつながったので、早く次の成果を発表したいです。」

絶滅危惧種であるニホンウナギ。捕食回避行動に関する研究から導かれる成果は、放流後の稚魚の生存率の向上など、資源保護の可能性を広げてくれる貴重な情報になるでしょう。今後の新発見にも期待が高まります。

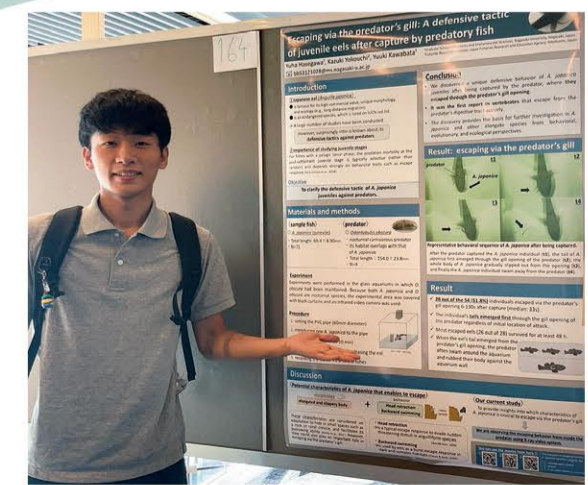
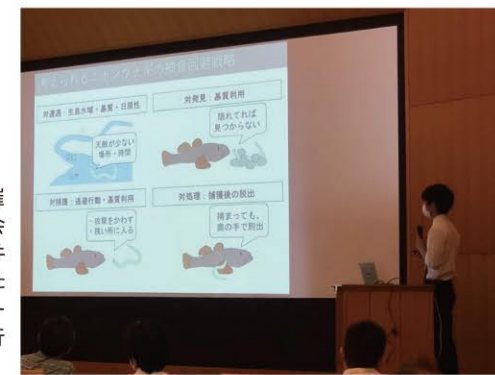


水産・環境科学総合研究科の河端雄毅准教授(左)と同研究科博士前期課程2年の長谷川悠波さん。

研究室で飼育しているニホンウナギの稚魚。エサやりや水槽の水替えも、研究活動に欠かせません。



2022年7月10日に開催された、東アジア鯉学会公開シンポジウム「うなぎの未来9」に招待された長谷川さん。研究者や一般の方を前に講演を行いました。



国際行動生態学会の会場では、発表、聴講など充実した時間を過ごした長谷川さん。スウェーデン人の研究者とは約2時間にわたって意見を交わし合い、欧米がウナギ保全の先進地であることも実感したそうです。

Circle

[サークル]



部室に残されたカメラ。

[全学写真部] 1959~ 写真でつながっていく過去・現在・未来

Circle Interviews
広報サポーターが
インタビュー



写真部取材 田中藍子さん 環境科学部2年
男子バスケット部取材 高田春歌さん 多文化社会学部1年



普段は意識していなかった物にも歴史が刻まれているのですね。

部長の松本香さん 環境科学部3年

— 現在どのような活動をしているのですか？
松本さん 主な活動は週1回の部会と、月に1度の撮影会です。撮影会では、現川や大村、長崎中心市街といった県内のさまざまなところに遠征に出掛けています。
— 撮影会ごとに、撮る写真のテーマは決まっていますか？
松本さん 特に決まっていません。遠征先の風景や動物など各自で自由に写真を撮

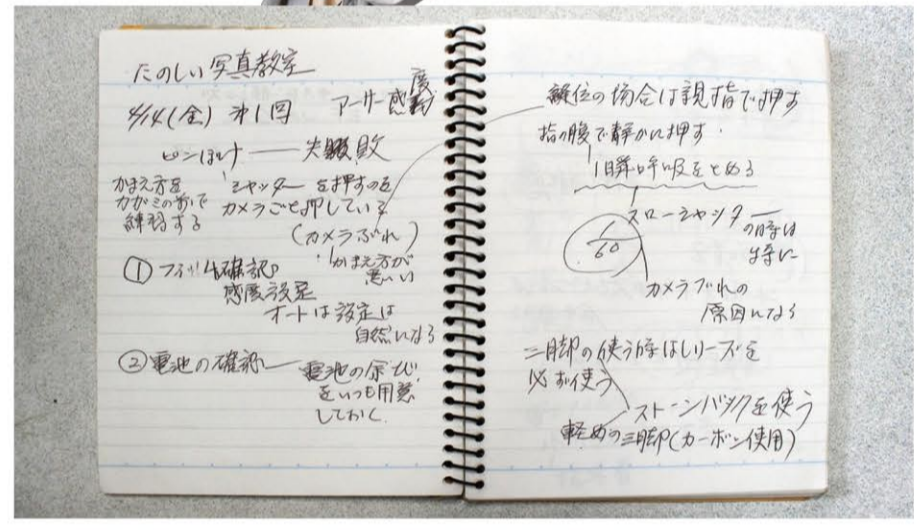
ります。今後はポートレイト撮影のために、モデルさんをお呼びのいいのかなど考えています。
— 撮った写真はコンクールに応募するのですか？
松本さん それも自由です。応募する人もいれば、特に何もせず、撮って終わる人もいます。また、写真部のInstagramアカウントがあるので、それに投稿することもあります。
— Instagramは2019年に開設されていて、割と新しいものなんですね。逆に先輩から受け継いでいる伝統や物はありますか？
松本さん 部の歴史自体は1959年創部ですが、歴史は古いのですが、実はすぐに思い付くものがないんです。
— 部室に何か眠っているのかもしれないですね。ちなみにこれは何ですか？
松本さん フィルムを投影するための映写機だと思っています。今はデジタルが主流なので使っていません。
— 棚に飾っている

フィルムカメラは年代物に見えます。
松本さん 僕が入部した頃からずっとここにあるので、先輩が置いて行ったのでしよう。今はディスプレイになっています。
— フィルムからデジタルに移行して、創部した頃はずいぶん環境も変わったと思いますか？
松本さん 皆さんが感じている写真の魅力と、先輩たちの思いはどこか通じるものがあるのではないのでしょうか？
松本さん そうかもしれません。僕自身、県外出身ということもあって、気に入った長崎特有の風景を、写真に収めることに魅力を感じています。美しいと感じたものを撮影する点は、時代が変わっても同じなんじゃないかなと思います。また写真を通じて、今は存在しないものを感じることも、逆に今を写真に残すことにも意味を感じています。
— これからも素敵な写真を撮り続けられるといいですね。今日はお忙しいところありがとうございました。

創部年：1959年(昭和34年)
部員数：39人
活動日：毎週1回(水曜)ほか



フィルム時代に使われていた映写機。



持ち主不明の手帳には、フィルムカメラ時代の撮影に関するメモが残されています。このイベントについて、何かご存じのOBの方いらっしゃいませんか？

[男子バスケット部] 1960~ 先輩が成し遂げた偉業を守り継ぐために



いつ頃のユニフォームなのかご存じのOBの方、いらっしゃいませんか？



I部残留を目指して頑張っています！

次期部長(予定)の田代爽さん 経済学部3年
総務の松尾俊也さん 経済学部4年

— 男子バスケット部は現在九州I部リーグでプレーされているそうですね。
松尾さん はい。I部リーグの他大学と異なり、技術の高い選手を集めたのではなく自ら集まった部員たちで意識の高いチームをつくり上げているところは長大男子バスケット部の特色です。I部は試合数も多く、費用の面と厳しい部分もありますが、良い試合をして爪痕を残せるよう頑張っています！
— 集まったメンバーで、ベストを尽くそうとする姿勢がとても素敵ですね。
松尾さん 今年はファンメニューを積極的に取り入れたりして特に熱いです。ハードな練習の中、部員同士仲が良く協調性も高い

です。
田代さん 世代ごとに距離感はずいぶんありますが、よく一緒に夕飯を食べたり、互いの地元を訪れたりもします。
— ここにあるトロフィーは何の大会のものですか？
松尾さん これは僕たちが毎年11月に運営する交歓大会のトロフィーです。昨年度で17回目でした。長大からは全学だけでなく各学部のバスケット部も出場しますが、近年は全学が優勝し続けているのでトロフィーもずっと部室にあるようです。
— ユニフォームは何種類かあるんですね。
松尾さん 緑が長崎大学のチームカラーで、今年は黒基調のものも加わりました。ですがこの紺地に黄色の文字のユニフォームは……いつのものかわかりません。
— もしかしら読者の方でご存じのOBさんいらっしゃるかもしねえ。松尾さん



代々受け継がれているトロフィー。

は現在4年生ですが、男子バスケット部で過ごした日々を振り返って、特に印象に残っていることはありますか？
松尾さん 僕たちが2年生の時に先輩方が成し遂げたI部昇格はもちろん、1年生の時に五島合宿、総務として運営した11月の交歓大会も思い出深いです。
田代さん 僕たちはコロナ禍の影響で五島合宿にはまだ行ったことがないんです。
松尾さん 2泊3日バスケットのきつい合宿です(笑)。でも最終日はBBQをしましたよ。
— 今年こそ実現すると良いですね。最後に今後の意気込み、また読者の皆さんへのメッセージをお願いします！
松尾さん I部リーグに昇格してから、県内の大会などでさまざまな方から声援をいただいています。いつも応援ありがとうございます。「I部残留」を目標に、今後も大勢いらっしゃる長大バスケット部の先輩方に、後輩として胸を張れる結果を出せるよう、実力を上げていきます。応援よろしくお願いします！

創部年：1960年(昭和35年)
部員数：24人
活動日：週4日(水金土)ほか

Saiyu Fund

[西遊基金]



一生に一度の“今”にエールを 特定のサークルに支援ができるようになりました

— 本学は2017年に「西遊基金」を創設し、本学を卒業された同窓の皆さま、保護者の方々をはじめ、多くの皆さまにご支援をお願いしております。その際、目的に応じてご支援をお受けするため、「西遊基金」内に3つの事業基金を設けております。具体的には、大学全体の活動を支援する「大学運営支援事業基金」、経済的理由により修学が困難な学生を支援する「修学支援事業基金」、そして学生または不安定な雇用状態にある研究者を支援する「研究等支援事業基金」の3つです。
— そしてこの度、新たに4つ目の事業基金として「サークル活動支援基金」を立ち上げました。学生生活において、サークル活動は非常に重要であり、地域貢献や自身のスキルアップのため、さらには自ら考え行動する力を養うなど、勉強や研究では得られない学びや体験を得られる、かけがえのない場

であることは、多くの皆さま共感いただけると思います。しかし、サークル活動には用具や施設使用料、移動費などが不可欠であり、さらには、部費だけでは賄うことのできない、活動に必要な財源をいかに確保するかが学生の課題となっています。
— そこで、彼らを支援することを目的に新たに立ち上げたのが「サークル活動支援基金」です。特定のサークル(学生時代に所属していた、今後の活躍を期待しているなど)への支援はもちろんのこと、サークルを指定せずにサークル活動全体へ支援いただくことも可能です。所得控除制度も適用されます。
— また、学生のサークル活動を応援することができるwebサイト「長崎大学サークル応援サイト」も立ち上げました。ぜひご覧いただき、サークル活動に励む学生たちを応援ください。

現在の基金構成

| | |
|-------------------|---|
| 大学運営支援事業基金 | 大学全体の活動を広く支援することを目的とした基金 |
| 修学支援事業基金 | 経済的理由により修学が困難な学生を支援することを目的とした基金 |
| 研究等支援事業基金 | 学生または不安定な雇用状態にある研究者に対する、これらの者が行う研究への助成または研究者としての能力の向上のための事業に充てる基金 |
| 追加 | |
| サークル活動支援基金 | 学生がサークル活動を行う上で必要な経費(備品の購入、遠征費等)を支援することを目的とした基金 |

追加

コロナ禍の学生へ 総額4,676万円の支援を実施

— 新型コロナウイルスの感染拡大が始まった令和2年度から、コロナ禍でアルバイト収入が5割以上減少したなど、生活が困窮していると認められる学生に西遊基金へいただいたご寄付を活用して、現金給付や生協で使用できる電子マネーを支給する支援事業を始めました。
— この支援は、令和3年度末までに総額4,176万円に達しています。学生からは「生活が困窮していたので非常に助かりました」「コロナ禍で両親の収入も減少しており、食費や教材費も切り詰めていたが、支援金によって、学生生活を送ることができるようになりました」とのお礼の声が多く寄せられました。
— 令和4年度も昨年度と同様、生協での食費や教材費に使用できる1万円分の電子マネーを支給することで、学生500人に対し、総額500万円の経済支援を実施することが決まっています。



生協では学生証に電子マネーをチャージできます。



学食で食事したり、生協で文房具をそろえたり、さまざまな場面で電子マネーを活用できます。

葉國璽交流会館 完成式

— 長崎大学文教キャンパスの北門に入ったテニスコートの一角に、留学生同士や留学生と日本人学生が交流するための新しい施設が完成しました。この施設は、本学医学部の卒業生である医療法人社団錦昌会理事長兼ちちはら整形外科院長の葉國璽先生のご寄付をもとに建設され、「葉國璽交流会館」と命名されました。
— 7月7日には、完成式典が開催され、学内外の関係者と共に台湾やウクライナからの留学生ら10人も出席。葉國璽先生は彼らに対し「積極的に日本人に接し、友達をつくってください。日本文化を学び、その経験



和室から望める日本庭園。

を今後活かしてください。この交流会館はその場として活用していただければ幸いです」と思いを述べられました。
— 建物にはキッチン併設のコミュニティラウンジや和洋のゲストルームを完備しており、学生たちの交流の場としてはもちろん、留学生のご家族の宿泊施設としても活用されます。



完成式の様子。

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、種々の問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援、さらに教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。

西遊基金に関する情報はこちらからご覧いただけます。